

## まえがき

本書は、石を素材とする彫刻家、林武史の作品論である。ごく初期の模索期を除き、一九八七年以降、本格的に制作を始めてから、二〇二三年までのおもな作品を対象としている。

「石を素材とする」と書いたが、もちろんそれ以外の素材も用いている。二〇〇四年からは土（壁土）を使い始め、二〇一一年には陶（もとは土である）が加わり、二〇一四年以降は木（廃材）も使うようになった。とは言え、石が基本の素材であることには変わりはない。しかし、林にとって石が彫刻を「形作る」ための造形素材であるかという点、なかなかそうとは言えない。また、「彫刻家」とも書いたが、林が作る作品が直ちに「彫刻」であるかという点、

それもちよつと立ち止まって考えた方がよいかも知れない。もちろん、林は東京藝術大学の彫刻科を出て、その後、同大学の彫刻科で彫刻を教えており、自らの作品を彫刻と呼び、自身を彫刻家と称している。二〇〇七年には「第二十二回現代日本彫刻展'07」で毎日新聞社賞を受賞し、二〇一二年には「第六回円空大賞」で円空賞を受賞している。円空大賞は必ずしも彫刻のみを対象としているわけではないが、彫刻作品で受賞したものだ。私たちはずっと、そのように林とその作品を認識している。しかし、話は別だ。彫刻の概念を子細に参照しながら、改めて林の作品を彫刻と呼ぼうとすると、そこに一瞬の躊躇を感じてしまう。もとより、それは悪い意味ではないし、林の責任でもなからう。その時代の多くの者がそうであったように、そこには林が大学で本格的に彫刻を学び始めた一九七〇年代後半の時代状況が大きく影響している。

七〇年代の前半、もの派やコンセプチュアル・アート、ミニマリズムが時代を席卷し、絵画や彫刻はもとより、美術そのものがその存立基盤を大きく揺るがされていた。美術はそれまでも増して無条件に自明なものではなくなり、「美術の終焉」が語られ、絵画や彫刻にとつて「冬の時代」でもあった。一九七六年に東京藝術大学の彫刻科に入学し、本格的に彫刻の勉強を始めた林も例外ではなかった。後年、個展カタログに収録するためのアンケートで、「これ

までに影響を受けたり、現在意識している芸術家がいたらおしえてください」という質問に答えて、美術を意識し始めたころに影響を受けたアーティストとして、カール・アンドレ、ロバート・モリス、リチャード・セラの名を挙げている。ちなみに、その後に関心をもった作品として法隆寺の《百済観音像》と尾形光琳《燕子花図屏風》を挙げているのだが（『HAYASHI TAKESHI New Sculpture 林武史展』ART SITE、一九九四年）。いずれにしても、三人はともにミニマル・アートの作家であり、従来の彫刻概念を大きく越境し、新たな地平を開いたことで知られている。彼らの作品は、それまでの彫刻概念を根本的ではないが、形成期にあった彼の彫刻観に根本から揺さぶりをかけたことは想像に難くない。その後、八〇年代以降に到来した新表現主義、シミュレーシヨニズムの波や、国内に目を転ずれば新しい日本画や工芸を求める動向など、そこにポスト・モダンやポスト・コロニアルなどの言説が飛び交う状況であった。自らの立ち位置を見定め、進む方向を探ること自体が困難な時代であった。そのような状況の中で林が選んだのは、取りも直さず「彫刻」に向き合い、その営み続けることであった。本書では、同時代の美術動向や彫刻概念の変容について立ち入るのが目的ではないが、その状況を念頭に置きつつ林の仕事

を考察したいと思う。林にとって「石」とは何であったのか。その作品はいかなるものか。そして、彼が「彫刻」と呼ぶ作品がどのように達成され、どのような世界を開いたのか。これを探ることが本書の目的である。

本書は三つのパートから構成されている。最初は、森田のテキスト「石、むきだし」である。テキストでは「空間」「身体」「物質」「記憶・時間」という林自身のテーマに基づきながら考察を進めている。これらについて可能な限り具体的に論じるように試みた。また、考察はおおむね作品の時系列に沿って、二〇二三年の最新作《緑の間——伊深》までを対象としている。その際、作品図版をできるだけ多く用いて、林の全体的な作品概要が俯瞰できるようにした。なお、別図のカラー図版ではテキストやインタビューで言及していない作品も収録している。林の仕事の広がりを紹介するためである。

次に、林のエッセイ「石の勝手」である。これは、傍からは窺い知れない作家と石との微妙な関係を制作のエピソードをとおして物語るものである。このあとのインタビューとともに、制作をめぐる作家の生の声を伝えるものとなる。

最後が、森田による林へのインタビューである。本書のきっかけはこのインタビューにある。これは林の東京藝術大学退任記念展を前に企画された。イン

タビユーの実施後に、森田のテキスト執筆と書籍化が決まったものである。そのため、テキストも随所でインタビュを参照しながら執筆されているが、むしろ、同じ意図に基づいてテキストとインタビュの二つが実現したと考えた方がよいだろう。

時代状況を遠くに意識しつつ、テキスト、エッセイ、そしてインタビュという三者の構成により、林武史の仕事を立体的なパースペクティブのもとで展望したいと思う。

森田一